

Wesley Hall News



幼稚園 イエスさまご降誕の劇
(2007年度 クリスマス礼拝)

青山学院スクール・モットー

地の塩、世の光

The Salt of the Earth, The Light of the World

(新約聖書 マタイによる福音書 第5章13～16節より)

No. 98

2008.12.8.

説教「神は私たちとともにおられる」	深町 正信	2
●開かれた宗教センターを目指して		4
大学との礼拝における交流	坂上 三男	6
高等部での礼拝証詞を終えて	飛田 貴基	6
各部間交流について	西田恵一郎	7
中等部での礼拝証詞を終えて	井上 祐貴	7
●創立記念礼拝説教		
輝かしい園にて	東方 敬信	8
一步踏み出せ。そして神を信ぜよ	石田 政美	10
神の前に真実に生き	岸 憲秀	10
●キリスト教図書紹介 Como vivimos los niños el adviento	合田 紀子	11
●青山学院資料センター所蔵のキリスト教貴重文献・史料 その25	氣賀 健生	12
●私の教会 東久留米泉教会	川島 祥子	14
●コラム サンタクロースは本当の人ですか？		15
●宗教センターだより		15

説 教

「神は私たちとともにおられる」

ヨハネの黙示録 第3章20節



深町 正信

名誉院長・前院長

「見よ、わたしは戸口に立って、たたいている。だれかわたしの声を聞いて戸を開ける者があれば、わたしは中に入ってその者と共に食事をし、彼もまた、わたしと共に食事をするであろう」

(ヨハネの黙示録 第3章20節)

この言葉は、復活されたキリストが、ラオデキヤの教会に語られた言葉です。有名な画家のホルマン・ハントの描いた聖画に「世の光」というのがあります。この絵は、家の扉の外にランプを手にしたイエス・キリストが立っておられて、外から、他方の手で扉を叩いている姿を描いています。この聖画をよく注意して見ると、扉の外側にはどこにもドアの取っ手がついていなくて、その内側から開けなければ中に入ることが出来ないことを暗示しているかのように描かれています。

すべての人の中心におられるイエス・キリストは決して外から力を行って、私たちの心の扉を無理矢理に壊して、そこに入ってくるようなことをなさらない方です。私たちの心の扉の前に立ち、私たちがその心の扉を自主的に、喜んで内側から開けるのをじっと待ち続け、静かに心の内なる扉をノックし続けられているお方です。

今年もクリスマスの日に中心に立つ主イエス・キリストを無視して、あるいは拒否して、自分の心の扉を閉ざしていることも出来ます。また、その反対に、心の扉を期待と喜びで開いて、主イエス・キリストを心の中に迎えることも出来ます。それは私たちそれぞれの自由な希望と決断により決まるのであります。本当のクリス

マスを迎える人というのは、この救い主イエス・キリストの訪れに対して、喜んで心の扉を率直に開いて、救い主として迎えるのであります。クリスマスの出来事について、よく知られているルカによる福音書第2章12節には、馬小屋の飼い葉桶の中に寝かせてある幼子イエスが、救い主の徴であると告げられています。

現代を生きる私たちは毎日、次々と起こるさまざまな事柄の中で右往左往して生活しています。又、私たちは、この世界が将来どうなるのかという不安と、絶え間ない悲しい事件の報道と喧騒の中に生きています。21世紀は脳科学の時代といわれたとおり、その分野は大きな発展を見せて来ています。その間に、救い主イエス・キリストがすでに私たちの世界を訪れてくださったというクリスマスの喜ばしい徴は無視され、見逃されがちであります。聖なる神様の御子がすでに卑しい人間となり、私たちに訪れてくださり、今も一人一人の心の扉に愛のノックをし続けていてくださることに思い及ばず、求めることが出来ていません。

父なる神様は私たちの心の扉に強権を発動して、その大きな力で打ち破って、私たちの心の中に入り込むことが容易に出来る方ではありますが、何故、その強権を発動されないのでしょうか。実は、そこにこそ、聖なる神様が人格神であるという大きな愛の秘儀が隠されているのです。

たとえどのように脆く、弱い扉であっても、その扉が閉ざされていることは、ここに入っては欲しくないという、その人の心の働き、意志が表されているのであります。

たとえその心の扉を破って、堅い心の部屋の中に入っても、本当に心から喜ぶ出会いは起こりません。それでは神の御子イエス様が本当に人格的に、その人と出会ったことにならないからです。父なる神様は決して義理や形式的な義務で考えておられず、尊い人格として取り扱ってくださるということです。イエス・キリストは私たちの心から喜んで、自覚的に、心の中に受け入れる日を静かに、忍耐深く待ちつつ、それぞれの心の扉を叩き続けておられる愛の神であられるのです。

マタイによる福音書第1章23節には「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。この名は、『神は我々と共におられる』という意味である」とあります。ここにも、人類世界の扉に父なる神様による最初の愛のノックとなるクリスマスの出来事が記されています。

クリスマスは、私たちが、御子イエス・キリストの誕生をどのように受け止めるかということにかかっています。「飼い葉桶」とは、私たちの心の貧しい部屋であります。その部屋の扉を内側から大きく開いて、「インマヌエルー神は我々と共におられる」の御子イエス様に出会い、真の喜びと希望と感謝をもって新しい年を迎えたいものであります。

私の少年時代は、日本が連合軍と戦っていた時でした。1945年6月の静岡大空襲により、静岡市の中心の町が一瞬の内に火災に包まれました。その空襲の夜、激しいサイレンの音に眠りを覚まされ、普段避難する防空壕ではなく、家の正面にあった日赤病院の三つの大防空壕のうち右側の壕に、母は三人の子供と大急ぎで避難しました。大音響と共に多数の焼夷弾が雨あられのように落ちてきて、防空壕の入り口にも火がつかしました。そこへ父が外から駆け込んで来て、皆に落ち着いて外に出るように必死で叫びました。私と弟と妹は父母に手を取られながら、防空壕の外に出て、驚きました。日赤病院の建物の周囲は火の海と化しており、町中の建物が燃え上がっていました。とにかく防空頭巾を被っていても顔が熱く、周囲の町全体が赤々と激しく燃

えていました。私はもう駄目だ、と子供心に思いました。父は怯える私たちを静岡教会の門の前に掘られた大きな防空壕まで連れて行き、そこに避難して、目の前で激しく燃えている教会堂とその高い塔をじっと見つめていました。やがて大音響と共に火炎に包まれた教会堂は大きな火柱となり音を立て、巨像が倒れるように崩れました。父がここも危険だと言い、私たちは目の前の駿府城のお堀の水面に近い土手のところへ移動しました。その時、駿府城の土手にある立派な松の生木が火をふきながら、激しい音を立てて燃えていたのが、今でも、つい昨日のこのように鮮やかに思い出されます。

その後、私たちは静岡市郊外の足久保に住む細田さんのご好意で、安倍川の奥にある蜜柑小屋で過ごすことになりました。数ヶ月して、私たちは再び焼け野原の中心にある静岡教会の牧師館の焼け跡に戻り、焼け跡から取り出した焼けトタンで小屋を建て、そこに住むことになりました。1945年(昭和20年)8月15日に敗戦の玉音放送となり、直ちにアメリカの進駐軍が駿府城内にあった陸軍静岡連隊の跡地に進駐しました。その日は午前中から夕方まで数多くの軍用トラックやジープに乗ったアメリカの兵士たちが機関銃や小銃を手にして、駐屯する様子が見られました。

ある日、一人の米軍の大尉と軍曹が焼け板に「静岡教会」と書いた看板を見て、突然入って来ました。私たちは丁度、昼御飯の雑炊を食べていましたが、その食物の中身を見て、大変に驚いた顔をして帰りました。その日の夕方、エストレイク大尉とショウラック上等兵という人がジープに沢山の缶詰めやキャンディやコンビーフの包みを積んで来て、「兵士たちの持ち物から集めたものです」と申しました。それには、「メリー・クリスマス」というカードが添えられていました。彼等の訪問は私の生涯決して忘れることの出来ない、天からのクリスマス・プレゼントに思えました。あの荒んだ戦中、戦後の日本の貧しい生活の中で生まれたての弟の死に悲しむ時にも、父母とともにインマヌエル、神は私たちとともにおり、愛をもって働かれている、と祈りました。



イースター礼拝



グリーンキャンプ



クリスマス礼拝

前号では主に大学の活動を紹介しましたので、今号では高中部について紹介します。

高中部では各部宗教主任、宗教委員の先生方を中心に、礼拝、諸行事、諸活動を展開しています。各部間の交流として、高等部では2004年度より、年に一度、大学聖歌隊による賛美礼拝が行われています(詳細は6頁参照)。中等部ではこの数年、隔年で学院フィリピン訪問プログラムに初等部や大学と一緒に参加し、現地での実際の交流だけでなく、事前事後の学習や成果報告書の作成を通して、各部の共通理解を深めています。また、高中部共、毎日の礼拝の他に週1回クラス単位での礼拝が行われ、各ホームルームで生徒が輪番で司会と感話を担当し、月1回はその礼拝の中で友情献金を行い、さまざまな支援のために役立てています。

高中部では下記に紹介した諸行事の他にも週1回、早朝祈祷会(中等部)、祈りの会(高等部)を行い、教職員と生徒と一緒に聖書を学び、祈りの時が持たれています。また、月1回は保護者の

	4月	5月	6月	8月	10月	11月	12月	3月
高等部 年間行事予定	イースター礼拝	特別礼拝	春の伝道週間 教職員聖書講座	教職員修養会(高中合同) グリーンキャンプ	秋の伝道週間	創立記念礼拝	クリスマス合同コンサート クリスマス礼拝	卒業礼拝

ンターを目指して

中等部編

方々にも「保護者聖書の会」を開催して聖書や讃美歌に触れていただき、青山学院の建学の精神であるキリスト教について学ぶ機会が持たれています。

各部では近隣教会の牧師先生方に随時、礼拝説教奉仕をしていただいておりますが、初等部とともにこれらの牧師先生方と懇談会を開くなど、交流が持たれています。

今年はACF(青山キリスト教学生会)の大学生で、高中部の卒業生が、久し振りに高中部の礼拝に戻ってきて証詞をしました(詳細は次頁参照)。年齢の近い先輩からの熱いメッセージに生徒たちも身を乗り出して、耳を傾けておりました。今後このような各部交流の機会を持ち続けていきたいものです。



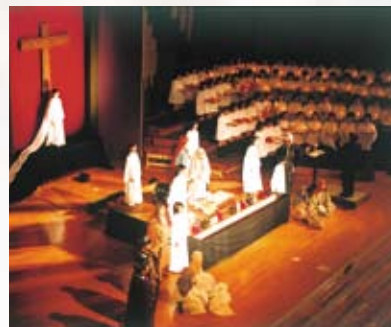
緑蔭キャンプ



緑蔭キャンプ



救世軍恵泉ホーム(特別養護老人ホーム)訪問



クリスマス礼拝(ページェント)

	4月	5月	7月	8月	9月	11月	12月	1月	2月	3月	
中等部 年間行事予定	教職員修養会(第1回) イースター礼拝 CF(クリスチャン・フェロシシップ) ワーク(第1回)	母の日・家族への感謝の日礼拝	緑蔭キャンプ	高合同教職員修養会 教職員修養会(第2回)	CF(クリスチャン・フェロシシップ) ワーク(第2回)	創立記念礼拝	クリスマス礼拝(ページェント)	救世軍恵泉ホーム (特別養護老人ホーム)訪問	宗教講演会(国際交流講演会と隔年で伝道週間)	卒業礼拝 (隔年)	青山学院フィリピン訪問プログラム (隔年)

大学との礼拝における交流

坂上 三男

高等部宗教主任



◇ 高等部では、大学との交流ということで、5年前から大学聖歌隊との交流を行っています。具体的には大学聖歌隊が9月の国内演奏旅行を終えた頃の日を選んで、高等部礼拝で讃美(讃美歌2曲)をしていただいております。

高等部にも聖歌隊がありますが、大学は大学なりに素晴らしいハーモニーによる讃美歌で、高等部の生徒たちもさすがに大学聖歌隊と思って、聴き入っています。聖歌隊員による聖書朗読と祈禱もあり、とても良い交流になっています。この交流を通じて、高等部生が大学聖歌隊に関心を持ち、行く行くは大学聖歌隊員になることを願っています。

◇ 交流の新しい試みとして、去る10月3日、大学3年生でACF(青山キリスト教学生会)所属の、飛田貴基君が高等部礼拝で証詞をして下さいました。

大学生が高等部の礼拝で証詞を行うという計画は、今年度のはじめに発案されたもので、とても良い計画であるが、続いて証詞を行う人がいるかどうかの問題でした。しかし、まずは実施してみるとということで、具体的な運びになり、飛田君に証詞をしていただくことになりました。飛田君は高等部卒業生ということもあり、高等部教員の賛成を得ることも容易でした。

当日の飛田君の証詞の内容は、「どうしてクリスチャンになったか」というもので、大変興味深く、また生徒たちに近い年齢ということもあって、生徒、教員共に話に聞き入りました。はじめての試みでしたが、礼拝としても、交流としても成功であったと思います。身近な年代の大学生の話は、高等部生を惹きつけ、伝道的にも良い影響力がありますので、今後も続いて証詞者が出ることを願っています。

高等部での礼拝証詞を終えて

飛田 貴基

文学部日本文学科3年



去る10月3日、私は母校である高等部の礼拝で全校生徒の前に立った。高等部水泳部のコーチをしていることもあり、見渡せば知った顔やお世話になった先生方がたくさん見える。

高校2年生で洗礼を受けクリスチャンとなった私は、卒業生として一人でも多くの生徒にキリスト教に興味を持ってもらえることを願った。幼稚園から大学院までであるこの青山学院の学びの中で、クリスチャンになる人は少ない。それは、キリスト教の教えを知識として知ってはいても、皆、神様を近くに感じることができないからであると私は思う。なぜならキリスト教を教えてくれるのは年の離れた先生ばかり。「自分とは違う人たちだ」と感じてしまうのも無理はない。その様な中で私の役割は、歳の近い身近な先輩として、わかりやすく語りかける事と感じていた。

私は昔から教会には通っていたし、キリスト教という“文化”は好きであったが、信じるに至った経緯は高等部での生活、その中で恩師との出会い、そして神様との出会いにこそある。そうして感じてきたことを礼拝の10分の間だけで語るのは至極困難なことではあった。しかしこの一貫教育の青山学院を最大限活かしていると感じる今回の恵みの中で、私は私にできることを精一杯行い、そして伝えようとした。結果、生徒達にどのような感覚が芽生えたかはわからないが、否、それは大した問題ではないのかもしれないが、このような先輩からのメッセージという試みは、是非とも続けていっていただきたい。

失敗してしまった！と思う部分も事実あるが、それも含めこの度の私のメッセージが少しでも高等部の後輩達の心に刻まれたならば幸いである。今後、高等部の様々な行事や部活の一つであるABFの活動などにも先輩が多く関わっていき、青学なればこそこの繋がりを更に活かしていただきたいと切に願う。

最後になるが、今回このような機会を与えられたこと、何より神様に感謝を捧げたい。

各部間交流について

西田恵一郎

中等部宗教主任



10月のある日、高等部の礼拝に出席するためにはPS講堂に向かっていました。途中で、何人かの中等部卒業生が挨拶をしてくれました。嬉しかったです。講堂に到着し、講壇に上がって見渡すと、生徒の約半分が見覚えのある顔でした。中等部の時とさほど変わっていない1年生、別人かと思えるほどデカくなった(成長した)3年生。懐かしかったです。そして、再び一緒に礼拝ができる喜びを感じました。これが学生、生徒との長い関わりを持てる総合学園の良さのひとつなのでしょう。

先日、青山学院大学経済学部3年生でACFのメンバーである井上祐貴君が中等部の礼拝でお話をしてくれました。彼は中等部の卒業生です。中等部の生徒だった頃は、「神などいない」と固く信じていた彼が、なぜクリスチャンとなったかを証してくれました。ユーモアを交えながら、自分に起こったことをきっぱりと宣言するようなお話でした。「中年のおじさんが小難しいことを言っているよりは、この方が生徒たちの中に言葉がスーッと入ってくるのだろうか…」と内心で呟いていました。

このように各部交流は既に行われていますが、これを一層進めて行くことは大切でしょう。しかし忘れてならないのは、言うまでもないことですが、交流を進めること自体が目的ではなく、それは一つの手順としてあることで、目的は幼稚園から大学院まで青山学院に関わる人たちが、イエス・キリストを知ること。そして、一人ひとりに必要な成長を手助けすることではないでしょうか。そのために一貫して教育ができる環境が与えられていることを感謝しつつ、用いるのであって、「一貫教育」という文言を実践していることを言うために幼児・児童・生徒・学生を利用することになってはいけません。「ですから、あなたがたは、現にそうしているように、励まし合い、お互いの向上に心がけなさい」(1テサロニケ5:11)というパウロの言葉を心に留めて置きたいものです。

中等部での礼拝証詞を終えて

井上 祐 貴

経済学部経済学科3年



「そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい。人々が、あなたがたの立派な行いを見て、あなたがたの天の父をあがめるようになるためである。」(マタイによる福音書5章16節)

今回、神様から中等部に遣わされ、神様を証しする機会が与えられたことに心から感謝しています。初の試みである各部交流の一環として、中等部一大学ACF(青山キリスト教学生会)間の交流機会が設けられ、その第1号として「中等部での礼拝証詞」という重大な責務を賜りました。これから後も、様々な世代を超えた交流がなされることを期待していますし、又私自身もその交わりには是非用いられればと思っているわけですが、今回の礼拝証詞で私が生徒たちに最も伝えたかったことは、「私自身が中等部生のときに、神についてどのように考えていたのか、そして、どのように神様を信じるようになったのか」ということでした。このことが生徒たちの心に伝わったかどうかは、それこそ神様しか御存知ではないのですが、大勢の生徒たちの前で「自分は神様を、イエス・キリストを信じている」と公言できるという恵みを感じることができた礼拝証詞でした。ところで、冒頭に引用した聖句は、私がクリスチャンとして伝道の業に励む際の指針であります。私は大学1年生のクリスマスに洗礼を受け、クリスチャンとなったのですが、大学2年生の1年間は自分自身の「罪」と向き合う1年間でした。これに対し、大学3年生となった私は、神様から与えられる「恵み」を感じることができるようになりました。そんな中で与えられた聖句が「マタイ5章16節」です。私が神様のことを語る際、私の話を聞いてくださっている人が「この人はなんて幸せそうに、恵みに満ちて神様を証しているのだろう」と思ってくさるならば、これ以上の幸せはありません。果たして、中等部の生徒たちには私が如何様に映ったのでありましようか？

「輝かしい園にて」

コリントの信徒への手紙 二
5章 17 節～ 19 節

東方 敬信

大学宗教主任



ある、抜けるような青空の日でした。中学生の私たちは、自分たちが幾分大人になった気分で、少し冒険して遠くの深大寺まで自転車で行く計画を立て、いまから相当前の甲州街道を3、4人で走っていました。気持は高揚し、顔にあたる風も気持ちよく、スピードをあげてペダルを踏んでいました。深大寺に近い、柴崎あたりになると、走っている右手前方に、道路から5メートルほど入った畑の所に、まさに私たちを誘うかのように、たわわに実った柿の木が見えてきました。もうこれは、創世記3章の世界です。あつという間もなく、舗装された甲州街道からそれて、3、4人の中学生の自転車は、一本の柿の木を目指して、一気に農道に走りこんでいました。それは、赤い柿の実をただで手に入れることへの誘惑でした。ついたとたん、全員でその農家の垣根にある木に手を伸ばして柿の実を取って、同時にアングリとかじりました。なんとその柿の実の渋かったこと。

それは、ほんの軽い気持の、しかし難しい言葉で言えば窃盗にあたります。古代教会のアウグスティヌスの罪の記憶と重なります。アウグスティヌスの場合は、梨の木でした。いたづらをする時の快感、かるく犯罪に手を染める時の快感とアウグスティヌスは言います。食べたのは、お腹が空いていたのではない。盗むことに快感があった、まさに罪への誘惑と云います。

創世記のエデンの園で、神はアダムとイブに三つのPをお与えになりました。最初は、英語でパーパス、目的です。人生の目的です。創世記2章15節に、「主なる神は人を連れてきて、エデン

の園に住ませ、人がそこを耕し、守るようになされた」とあります。園を耕し、守るのです。これは、何も農業の話をしているわけではありません。与えられた園を大切に育てるように目的を与えられた。アウグスティヌスは、さらに理解できるように助けて、園を使い切ってしまう道具とするのではなく、プレゼントのように慈しんで育てることです。わたしたちの身の回りの自然、出会う人間関係、これらをプレゼントのように慈しみ育てることです。第二のPは、パーミッション許可です。「すべての木からとって食べなさい」とあります。「見るからに好ましく、食べるのに良いものをもたらすあらゆる木を生え出させ」とありますから、素晴らしい楽園、素晴らしい劇場であったと考えられます。そして、第三のPは、プロヒビションつまりたった一つの禁止がありました。それは、善悪の知識の木からは食べてはならない。もっと分かりやすく翻訳しますと、善から悪まですべてを知っていると思ひ込み、自分が我が物顔に威張ることの禁止です。

そこには輝かしい喜びの園があり、私たちには自由があり、有限ではあっても知識を蓄えることができ、生き生きと出会う場所だったと言えます。しかし、たった一つ約束があった。あらゆる知識より大切なものとして、信頼を守られなければならないことです。

しかし創世記第3章には、残念ながら三つの混乱が起こったと記されています。

最初の混乱は、罪です。倒錯現象です。信頼することまた記憶して感謝することに代えて、自分の知識や経験を誇ることでした。輝かしい喜びの園の、たった一つの約束を無視することは、自然も、男も女も、プレゼントのように慈しんで互いに育て合うのではなくて、自分の道具として使用することです。お互いを尊重すべき美しい人格とみるのではなく、自分の欲望の道具としてしまうことです。便利な道具として互いの優しさや時間を奪おうとする時、満たされている恵みを忘れ、不満を持つようになります。

第二の混乱は、悪と呼ぶことの出来るものです。それは、罪が当たり前になり、文化が病んでしまうことです。もう、倒錯現象が当たり前に

なってしまう、ありふれた事実になることです。アブノーマルが、ノーマルになってしまうことです。蛇がその役割を果します。「蛇は女に言った。『決して死ぬことはない』』とあります。それは、信頼したり、感謝の気持を覚えたりしないで、そんなことは大したことではない。なくては生きていけるよ、ということです。このような悪は、大声を上げて、目立つようなことではないかもしれない。しかし、ウイルスのように確実に広がっていくものです。高度経済成長があると、いつの間にか、貧乏であることが、恥ずかしいことであるかのように誤解され、成金がセレブとはやし立てられるような文化的な病になります。さらに本質的なことを言えば、聖なる存在や聖なる方が、軽んじられ、忘れられて、俗なるモノが尊重され始めることでしょう。

第三の混乱は、馴れ合いです。互いに無関心になることです。これらは次第に、園の栄光から輝きを奪っていき、心に翳りが生じ、豊かな心が失われてきます。さらにアダムは、言い訳を繰り返します。「あの女が、木から取って与えたので、食べました」。それは、わたしのせいではない、あの人が悪いんだ、ということです。このような言い訳はいくらでも増えていきます。わたしは忙しかった。わたしはそんなことを知らなかった。そんなことは誰でもやっていることではないか、とととん言い訳がふくらみ、喜びが失われていきます。そして、かけがえのないプレゼントのように与えられた、草花や木々の恵みも、素通りするようになり、感謝を忘れ、あたりの世界が陳腐化していきます。

ノーベル生物学賞を与えられたローレンツが、奥さんと一緒に森の小道を散歩していた話があります。爽やかな鳥のさえずりが、森の静寂(しじま)に響いています。しかし、そこに若者が自転車に乗って通りかかりました。しかも、がなりたてるラジカセをかつきながら。そのとき奥さんがふっとつぶやいたのです。「彼は、鳥のさえずりを聞くのが不安なのね」。それは、圧倒的に便利な文明の中で自分を見失っている現代人を象徴している、とローレンツは言います。静かに小鳥のさえずりを聞くように礼拝の言葉や音楽

を聴く、聖なる方の前で頭をたれる、そのような祈りの生活を失った毎日ではないでしょうか。

この時、私たちは、想像力イマジネーションを必要とします。少しも感謝せず、不平不満に閉ざされてしまうことから抜け出して、本来のわたしたち人間の姿と世界の有り方を見つめるイマジネーションが必要です。このときのイマジネーションを回復するために、イエス・キリストは、その御生涯と十字架の苦悩と復活の勝利を通して神の国の福音を示された、といえます。また豊かなイマジネーションによって神の国の福音を生きた人の歴史を記憶することが必要でしょう。

青山学院に40年勤めた宣教師の方がその使命を終えて帰られるとき、だいぶ前に送別会をしました。その方は、進駐軍の兵隊として日本に来て、それから日本のために福音を伝えようと思って、アメリカに帰って神学校に行き、宣教師になって再び来られた方でした。その方は最初に兵隊で日本に来られたとき、英語を教えてほしいという立派な御家庭の家庭教師となって英語を教えられました。ところが、宣教師として再び日本の地を踏んだとき、その家庭のご主人は東京裁判で戦犯として判決を受け、処刑されていたのです。その立派なお宅は東条英機氏のお宅でした。宣教師として日本に来られたリーディー先生は、それから何年も、その処刑された日に必ずお墓とご家庭に花を届けられたそうです。よく、わたしたちは、汝の敵を愛せよ、という主イエスの言葉を聞きますが、それが言葉だけでなく、実行されたのです。これは、決して戦争に勝った者の負けた者に対する哀れみではなく、神の前で互いに争い合う人間の愚かを悲しみ、互いに愛し合う平和の精神によるものでした。もちろん、そのことは、送別会の席で、ご本人からではなく、そのことを知っている関係者から知らされたのです。心打たれました。まさに、こういう精神が青山学院にあつて、力を与えてくれているのです。

(2008年11月11日 於:ガウチャー記念礼拝堂)

**「一步踏み出せ。
そして神を信ぜよ」**

列王記上 17 章 1 節～ 7 節

石田 政美

日本バプテスト連盟
横浜 JOY バプテスト教会牧師



「神の前に真実に生き」

ローマの信徒への手紙 12 章 1 節～ 2 節

岸 憲秀

日本キリスト教団
千葉本町教会牧師



●今、世界中がある大きな転換の中におかれている時代のように思われます。なりふり構わず金銀を追い求めてきた社会のシステムが音をたてて崩れました。そのため、多くの崩壊現象が起っています。そして、人々は不安時代を迎え、これから世の中どうなっていくのか、誰も、社会のこと、そしてまた人生のことで、その行く末を見通している人はいないのです。

●政治の世界や経済の世界だけではないと思うのです。家庭にあっても、職場にあっても、私たちの毎日の生活は、みな「行く末を知らず」ではないでしょうか。どう生きてよいのか分かりにくく不安な時代だと思うのです。

●私は20年間証券会社に勤めていました。会社の中には新興宗教にも近いようなある種の熱気と信念がありました。そこでもむしゃらに働いておりましたが、私の心には常に平安がなく、多くのことを思い煩って、心も身もバラバラになっていました。

●そんなある日、「エリヤは、私たちと同じ人間であった」(ヤコブ5:17)という御言葉が私の心に飛び込んできました。彼は旧約の大預言者でしたが、私たちと同じ弱点をもち、私たちと同じ失敗をし、私たちと同じように不安と恐れの中にいたのです。エリヤの弱さは、神に近づこうとする人々に励ましを与えてくれます。

●「主の言葉がエリヤに臨んだ」(列王記上17:2,8)。同じように、神の言葉は私たちにも臨んできます。神は一度にすべての指示を与えられず、私たちが踏み出すことが可能な一步を示してくれます。その先のことは神を仰ぐことにより、次の一步を指示してください。一步踏み出すごとに、神は、足の下に堅固な平らな石を用意してください。どんな深霧の中にあっても、神の御言葉に従い、踏み出すなら、神が造られた最高の人生を生きることとなることでしょう。

(2008年11月12日 於:ウェスレーチャペル)

青山学院の教育は

キリスト教信仰にもとづく教育をめざし、
神の前に真実に生き
真理を謙虚に追求し
愛と奉仕の精神をもって
すべての人と社会とに対する責任を
進んで果たす人間の形成を目的とする

青山学院が134年前、女子教育から始められ、時代の先駆的な位置にあつて、今日までキリストの香りを放ち続けたことは感謝にたえない。そして、そういう人々を育てたことも。

人間は神さまに賜物を与えられ、それぞれ召された存在である。神の前に真実に生きるために。しかし、残念なことに、実際の私たちの歩みは、いつも神の前に真実に、召しに応え、賜物を生かしているとは限らない。主イエスの弟子たちですら、時にその召しを見失ったほどに、罪の世の誘惑は激しいものだ。

御言は「自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい」というが、これは、主イエスの十字架において、私たちの存在が、既に神に喜ばれた聖なる者だということだ。そして、そのように生きるために、「心を新たにして自分を変えていただき、何が神の御心であるか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なことであるかをわきまえるようになりなさい」と勧められる。この「変えていただき」は蛹が蝶に変わるときに用いられるメタモルフォゼである。神によって聖なる者とされている私たちは、神の前に真実に生きることのできる者として造りかえられている。

(2008年11月11日夕礼拝 於:ガウチャー記念礼拝堂)

絵本 “Como vivimos los niños el adviento” 「子どもたちのアドヴェントの過ごし方」

カティア・アルバラン著

合田 紀子

初等部教諭

思い返してみると、十年前のアドヴェントの時期に、「ウェスレー・ホール・ニュース第58号」に「¡ Viva Mexico! 」という題でクリスマス特集を書かせていただきました。今回、再び、クリスマスについて紹介できる恵みを感謝いたします。

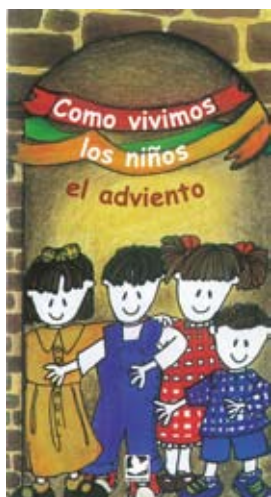
私が初等部に奉職して二年目の夏に、飛田浩昭部長に紹介していただき、CISV (Children's International Summer Village) 「国際子ども村」に参加しました。世界約十ヶ国の子ども、リーダーが、夏休みを共に過ごし、世界平和について考え、活動していくことを体験しました。

数年前のクリスマスに、当時親交があったメキシコのリーダーから、大きな封筒が届きました。その中には、手作りの絵本が入っていました。

この絵本の中には、友人カティアが、イエス・キリストを思う気持ちを、祈りの言葉に合わせて、子どもたちに向けて表現しています。物語は、このように始まります。

「イエスさまは、私たちのお友だちです。もうすぐ、私たちのもとに来られます。どのようにお友だちを迎えたら良いのでしょうか。イエスさまをお迎えするにあたって、喜びを持って準備させて下さい。毎日、自分に何が足りないのかを考えられますように。… (中略) 私たちは、イエスさまに何を贈れば、喜びのかを教えてください。」

この準備期間とは、待降節 (アドヴェント) と言い、イエスの誕生を待ち望む時です。毎週日曜日に、待降節の日が過ぎていくのに合わせて、一本ずつロウソクを灯していきます。



一週目は、次のようにお祈りすると書かれています。

「幼子イエスさまが来られることを優しい心で待ち望めますように。イエスさまが、ゆっくり眠れる場所を用意できますように。イエスさまを見ることができたら、歩き出せないほど強く抱きしめられますように。」

二週目は、次のようにお祈りすると書かれています。

「私の献身的な家族が、いつもお手本となり、喜びを持って、イエスさまに心を向けられますように。」

三週目は、次のようにお祈りすると書かれています。

「イエスさま、平和を与えて下さい。イエスさまが、私たちのもとに来られることは、最高の贈り物と言わせて下さい。すべての子どもたちが兄弟姉妹となり、皆でクリスマスおめでとうと心をついでできますように。」

四週目は、次のようにお祈りすると書かれています。

「イエスさま、私は、あなたの友だちです。アドヴェントの時期に生きていることを嬉しく思います。」

私たちは、アドヴェントの時期に、どのようにお祈りするのでしょうか。心静かにイエス・キリストを待ち望み、世界平和を希望する心を持ち続けたいと思います。



氣賀 健生

大学名誉教授

青山学院資料センター所蔵のキリスト教貴重文献・史料紹介第25回。今回は故比屋根安定教授執筆「日本美以教会史・未定稿」(当資料センター青山分室所蔵)を紹介しましょう。これは文字通り未定稿ですが、山路愛山書簡、松本總吾(以策)手記といった貴重な史料をふんだんに使った超貴重文献です。

1959(昭和34)年、青山学院は創立85周年を迎えました。当時の古坂崑城院長は、記念事業のひとつとして、日本メソジスト教会史の編集計画をたて、比屋根安定教授にその執筆を依頼しました。この計画について、「青山学院85年史」はその附録で大要次のように説明しています。

即ち、青山学院の歴史と最も関係の深い教会は、1907(明治40)年に合同日本メソヂスト教会が成立する以前のメソジスト三派のうちの美以(メソジスト・エピスコパル)教会であった。他の二派即ちカナダ・メソジスト教会、南美以教会の教会史は既に出版されていたが、美以教会史は未だ出版されていなかった。幸いにして同教会に関する史料は青山学院が最も豊富に所蔵しているので、美以教会の日本宣教開始から、カナダ・メソジスト、南美以両教会と合同して明治40(1907)年に成立した日本メソジスト教会、また同教会が昭和16(1941)年にプロテスタント諸派と共に日本基督教団に加入するに至るまでの凡そ70年間の修史に着手したい。これは当青山学院が着手しなければ、美以教会史に始まる日本メソジスト教会史は遂に決して実現しないであろう、と。

比屋根教授は、増田金四郎氏(同氏については青山学報155号[1991]80頁参照)の協力を得て、大学図書館所蔵の資料によって執筆を開始しましたが、後になってその出版予定が不確定であることを知り、途中で執筆を放棄しました。比屋根教授の放棄した未定稿は、当資料室の机の中に未整理のまま残されていました。それら

を1960年頃当時資料室長であった松田重夫氏が改めて整理し、「日本美以教会史未定稿」として今日に残されているものです。内容の推敲も不十分、ページも不完全で順序不同ですが、その全容は下記の7篇建てで構成される筈のものであったと推測されます。

- 第一編 ウェスレイとメソジスト教会(未稿)
- 第二編 美以教会史
- 第三編 メソジスト教会史[カナダ?]
- 第四編 南美以教会史
- 第五編 三派合同の経過
- 第六編 日本メソジスト教会(未稿)
- 第七編 日本基督教団に参加す(未稿)

以上原稿用紙に190枚

それでは、以下にこの原稿の内容を簡単に紹介しましょう。全体として第[]章のように数字が書かれていなかったり、その分節の(一)(二)等のタイトルが未定の箇所があったり、まさに未定稿ですが、内容は比屋根教授の面目躍如と言った詳細な記述が至る所に展開されています。

第一編は未稿で、第二編「美以教会史」は「日米外交開始とプロテスタント開教」から始まります。「ペルリ艦隊の来航」「マクレイその他の諸宣教師の来日」と続き、「日本ミッションの創立」となりますが、マクレイを中心とした開教情況が述べられ、ここでは切り貼りなどを使っています。そして婦人ミッションの項ではスクーンメーカーの日本到着が報告されています。次の章ではマクレイとコレルその他の宣教師達の初期伝道状況、そして婦人外国伝道会、それにソーパー、スクーンメーカーの活動が描かれ、津田梅子にも言及し、麻布、築地から青山へと発展する東京英和学校の成立経過とガウチャーの寄金が述べられます。東北、北海道、横浜、長崎と宣教活動の様子が述べられてこの章が終わります。

次は「第二章 マクレイ」とあって、マクレイの中国伝道を三節に亘って詳しく論じています。日本開教の事情説明と併せてマクレイの宣教活動の詳細について論じ、松本總吾(以策)の手記

を紹介しています。耕教学舎、美以神学校の開校の事情を述べ、美以神学校と東京英学校の合同を説明。スクーンメーカーの活動と女子小学校→救世学校→海岸女学校→青山女学院の一連の発展が述べられます。

次の第[]章では明治17年(1884)日本美以美教会の第一年会が成立し、その最初(原稿では「最後」となっていますが、これは書き違いと思われます)の任命表が記されていますが、この項目などは詳細を極めていて、貴重な史料としてまさに比屋根教授ならではの感があります。続いて初期の雑誌として『美会新報』『メソヂスト教会新誌』『真理の鏡』を紹介し、『護教』の創刊に到ります。ここでは主筆をつとめた山路愛山の書簡及び手記を15ページに亘って長文引用してありますが、これなどは超貴重史料といえるでしょう。そして初期の教文館について記しています。

このあとは宣教師イビーについてかなり詳細に述べられ、東洋英和学校、同女学校、そしてその神学部消長についての記述があり、文部省訓令12号による東洋英和学校閉鎖に言及しています。

ここで「以下順序不確」と編集者の手で書かれています。そしてこのあとは東京、静岡、山梨、金沢、長野の宣教状況が書かれ、各教会の創立、それらの教会で働いた人々が詳しく記されていますが、これは主としてカナダ・メソヂスト教会関係の宣教状況と思われます。カナダ・メソヂスト教会関係の記述はまだ続き、第[]章は「日本最初の部会」に始まり、「四十年五月、合同当時の状態」と続き、マクドナルド、カックラン等カナダ・メソヂスト教会の宣教師を紹介した後、第三編では「メソヂスト教会史」の標題のもとにカナダ・メソヂスト教会の本国での創立から日本伝道の状況、各教会創立の事情、マクドナルド、カックラン、イビー等宣教師の働きなどについて、こと細かに原史料を用いて記述しています。次に第四編では「南美以教会史」の宣教事情が上記カナダ・メソヂスト教会と同様、各教会の設立、会議の様子など詳細にわたって記され、第五編「三派合同の経過」と続きます。ここでは「在日本メソヂスト各派合同基礎修正案」1-8



執筆中の比屋根安定教授。
後方は増田金四郎氏。

条と附則が全文掲げられ、第一回総会議員として各教派の代表者を列挙し、「合同全権委員に呈する書」全文が引用されていますが、これなどは超貴重史料といえましょう。そして最後の第六篇「日本メソヂスト教会」、第七篇「日本基督教団に参加す」は内容未稿です。以上が比屋根安定執筆「日本美以教会史・未定稿」として当資料センターに残されている史料です。

では、この執筆者比屋根安定教授を御紹介しましょう。比屋根安定(1892-1970)は、草分け時代の日本宗教史学者です。その学風は彼によれば「一本道を通らず多岐にわたりにて」西欧神学を日本の風土、習慣の上に植えつけようというものであり、綿密な神学的論究より、この日本という異教的地盤での感性から問題を捉えようとするものでありました。彼は琉球処分によって上京した尚泰王の随員(按司)の家に生まれ、下町で育ち、下町の下世話的心情を備えて育ちました。中学時代を沖縄で過ごし、青山学院神学部を出て東京大学で柿崎正治博士の下に学びましたが、幼少時代から神童と呼ばれた恐ろしい程の記憶力と、青山と銀座往復の路面電車の中で雑誌を一冊読破する程の速読と把握力と博識を以て、神学、宗教学、歴史学、民俗学、それに“芸能”を理解しました。1921-44年の間青山学院神学部で教鞭をとりましたが、その本領は常に“筆で立つ”人であり、膨大な著書、論文が残されています。比屋根教授については、いづれ稿を改めて御紹介したいと思います。

東久留米泉教会

川島祥子

幼稚園主事

私が所属する東久留米泉教会は西武池袋線東久留米駅から徒歩10分に位置し、近くには鯉や鴨の泳ぐ黒目川があり、東京学芸大学附属養護学校の緑ゆたかな敷地が広がっています。毎日曜日10時には近くのグレゴリアン教会から鐘の音も響く静かな環境の中にあります。

東久留米泉教会は「日本長老教会」に属しています。普通は「教団」「連盟」「同盟」などの教派をよく耳にしますが、さて日本長老教会とは何だろうと思われる方も多いと思います。日本長老教会は1956年12月創立の日本基督長老教会と1979年6月創立の日本福音長老教会が東京に蒔かれた改革主義信仰を受け継ぐものとして、1993年5月に合同して設立されたものです。教派形成は安易な私党的なものであってはならないとの立脚点で、「ウェストミンスター信仰基準」に立ち、外国宣教団からの資金援助を受けるのではなく、自主自営で教会形成を目指したのです。さて、「長老教会」ですが、会員の自由意志によって選ばれた長老によって教会政治が行われていくということで、年齢の長じた方が集まった教会という意味ではありません。ちなみに59の教会から成り、2006年度では教師(牧師)が72名、信徒総数は3491名です。



さて、東久留米泉教会はまさしく聖書のみことば「わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る」(ヨハネ4:14)

に示された、神様の愛の命に溢れた教会を目指しています。1971年10月にダビデ・マーチン宣教師が開拓し礼拝が始まりました。現在の牧師は加藤正之牧師です。主日礼拝ではだいたい40~50名の出席があります。

一人ひとりの信徒が聖書のみことばから恵みをくみ出し、信仰の養いを受けることを大切にしながら、「恵みのみ」すなわち一方的な神様の愛にある恵みをともに受けるものとして、教会の交わりを大切に考えています。他の教会と同様、青年会、婦人会、壮年会がありますが、互いによく祈り合うことが特徴だと思えます。私自身所属して13年が経ちますが、家庭的な教会だと今もなお思います。礼拝後はお茶も用意され、時間のある方は二階で栄養満点のカレーを頂くことができます。1994年に教会から日本ウィクリフ聖書翻訳教会の宣教師として久米のぞみ師をパプアニューギニアに派遣しました。現在、ニューブリテン島にあるワシラオ村・セゲ村などのアタ語を話す現地の方々のために聖書翻訳の働きをしています。小さな教会ですが、こうして世界に向けて宣教の一端を担えることを幸いと考えています。

教会の玄関前は手入れした花々が植えられ来る人々の目を楽しませてくれますが、クリスマス時期になると教会を豆電球で飾り、少しでも地域の人々に親しんでもらえるよう努めています。

東久留米泉教会

東京都東久留米市氷川台1-8-13

TEL:042-475-9604



西武池袋線 東久留米駅北口 徒歩7分

幼稚園より

幼稚園では、11月28日(金)、12月5日(金)、12月12日(金)に3回のアドヴェント礼拝を子ども達・保育者・保護者と共に守り、一人ひとりがイエス様をお迎えする心の準備をしています。皆で

クリスマス礼拝を心から待っています。

クリスマス礼拝

12月17日(水)

聖誕劇を中心とした礼拝を守り、イエス様のお誕生をお祝いします。礼拝後は学院内にキャロリングに出かけ、クリスマスの喜びを多くの人に伝えます。昨年はキャロリングを終えて幼稚園に帰るとサンタクロースが一人ひとりの子ども達にプレゼントを運んでくれました。今年はどうでしょう。楽しみです。



始業礼拝

2009年1月9日(金)

冬休みの間、神様に守られて過ごすことが出来たことに感謝をします。また3学期神様に守り導かれて豊かに過ごすことが出来るように、子ども達・保護者の方達も共に礼拝を守り、3学期がスタートします。

(教諭 久保小枝子)

初等部より

神の御子イエス・キリストの御降誕のお祝いの準備をするアドヴェントから、教会暦は新たに始まります。初等部では、この時期雪山に学校を移して行われる「雪の学校」に向けて様々な準備が始まります。

アドヴェントコンサート

11月28日(金)

初等部米山記念礼拝堂にあるベツレオラ社製のパイプオルガンを学外の方々にも聴いていただくコンサート。今回は、聖ヶ丘教会オルガニスト大平健介氏(東京芸術大学4年生)を迎え、アドヴェントにまつわるオルガン曲をお楽しみいただきます。

クリスマス讃美礼拝

12月20日(土)

50年以上同じ台本で演じられるページェントを中心にした讃美礼拝。

初等部ハンドベルクワイアコンサート

2009年3月3日(火)

33年の歴史のあるハンドベルクワイアによるコンサート。子どもによる天使のハーモニーを奏でます。

卒業礼拝

3月9日(月)

初等部6年間の生活に感謝し、別れを告げる礼拝を守ります。

6年生を送る礼拝

3月13日(金)

卒業生が「友情の火」と呼ばれるろうそくの炎と共に、聖書の御言葉を贈り、御言葉による返礼を受ける礼拝。

(宗教主任 小澤淳一)

中等部より

クリスマス礼拝

12月18日(木) 14:00 ~ 15:30

青山学院講堂

礼拝はページェント形式で行われ、聖歌隊・聖書朗読などあらゆる奉仕が生徒によって進められます。

特別養護老人ホーム恵泉ホーム訪問

2009年1月17日(土) 14:30 ~ 15:30

ハンドベルや箏曲の演奏、折り紙などを通して入居

サンタクロースは本当の人ですか？

「サンタクロースは本当の人ですか？」はい、サンタクロースはミラと呼ばれる小さな町、今のトルコに4世紀に住んでいた人に起源があります。東方のギリシャ正教会の司祭でニコラスという人がいました。彼はキリストの模範に従って、他の人々のために自分を犠牲にし、親切に人々に接し、町の司教に選ばれて歴史的に聖人と認められました。

聖ニコラスは特に子供たちを愛し、自分とわからないように変装して、貧しい子供たちに食物、お金、プレゼントを与え、彼のこの行いが全世界に知られるようになったのです。教会の歴史上のどんな人物よりも、彼の名前を付けた教会が多いのには驚かされます。しかし、最も大切なことは聖ニコラスの心です。彼はキ

リストの愛と平和と喜びを世界と分かち合いました。

善意と寛大の人、聖ニコラスの行いが広まるにつれて、彼の名前は、聖ニコラスから聖クラスへ、そしてシスタークラスへ、最後にサンタクロースへと変化し、日本でもサンタクロースとして知られるようになりました。彼の名前と外見は時代が過ぎて変化したかもしれませんが、彼のメッセージは今も同じです。人間に対する神の愛は、イエスの誕生を通して現されたというクリスマスの本当の意味を教えているのです。本当のサンタクロース、聖ニコラスの行いによって、イエス・キリストがクリスマスが一番の中心であることが分かります。この特別な祝日、クリスマスはケーキとプレゼント以上のものです。本当のクリスマスの意味は人類に対して愛から出る親切な行為、与えること、寛大に分かち合うことなのです。(シエロ マイク)

宗教センターだより

者の方々と交わりを持ちます。

伝道週間

2月9日(月)～13日(金)

青山学院講堂

日本基督教団ベテル教会牧師 網中彰子先生

信仰生活、また、教会学校への招きの時です。

卒業礼拝

3月13日(金) 9:00～

青山学院講堂

張田 眞先生(日本基督教団鳥居坂教会牧師)

(宗教主任 西田恵一郎)

高等部より

クリスマス礼拝

高等部のクリスマス礼拝、祝会は12月19日(金)、PS講堂で行われます。第1部は礼拝。クリスマス説教は、及川信牧師(中渋谷教会)、「たった一つの贈り物」です。聖歌隊の賛美とハンドベル部による演奏が特別に加わります。

第2部としてクリスマス祝会を行います。生徒自身によるキリスト降誕の祝いとして、4～5グループによるクリスマス曲の演奏等々が行われます。

クリスマス合同コンサート

聖歌隊、オルガン部、ハンドベル部による合同コンサートは12月20日(土)午後4時からガウチャー記念礼拝堂で行われます。今年もオルガン部メンバーによるオルガン演奏、ハンドベル部のハンドベル演奏、聖歌隊の合唱によるメサイアが演奏されます。

このコンサートは一般に公開されていますので、誰でも入場できます。多くの方のご来場をお待ちしています。

(宗教主任 坂上三男)

女子短大より

クリスマス礼拝

12月10日(水) 13:00～14:30

青山学院講堂

説教：深町正信氏

(青山学院名誉院長)

演奏：短大聖歌隊、短大ハンドベル・クワイア、ゴスペル・グループ

クリスマス・チャペルコンサート

12月19日(金) 18:00～19:00

女子短期大学礼拝堂

演奏：短大聖歌隊、短大ハンドベル・クワイア、ゴスペル・グループ

天城・冬の集い

2009年1月30日(金)～2月1日(日)

天城山荘

特別講師：及川信先生(短大兼任講師)

(宣教師・准教授 シェロ マイク)

大学より

クリスマス礼拝

12月16日(火) 18:00～

ガウチャー記念礼拝堂

説教：加藤常昭氏

(日本基督教団隠退教師)

12月18日(木) 17:50～ ウェスレー・チャペル

説教：小友 聡氏(東京神学大学教授)

皆様のおいでをお待ちしております。

オルガニスト養成講座受講生発表会

12月22日(月) ウェスレー・チャペル

2009年2月3日(火) ガウチャー記念礼拝堂

講座受講の学生によるパイプオルガン発表会です。

(宗教センター事務局 平野修一)

本部より

Art クリスマス Aoyama

11月26日(水)～12月19日(金)

短大ギャラリー他

クリスマス

をテーマとし

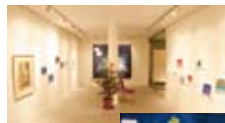
た絵画展です。どなたでもご自由においで下さい。

教職員新年礼拝

2009年1月8日(木) 16:30～

ガウチャー記念礼拝堂

(宗教センター事務局 平野修一)



No.97号 お詫びと訂正

2頁 清水 正 → 清水 正
高等部宗教主任 → 高等部聖書科教諭
深くお詫びし、訂正いたします。

編集後記 主イエス・キリストの御降誕を迎える準備の期間、待降節に入りました。巻頭説教に深町正信先生(前院長・名誉院長)から心にしみ入るすばらしいメッセージをいただきました。わたしたちが神の御子の御降誕を待つのではなく、神様ご自身がわたしたちを待っていてくださることを、深い感動と共に教えられました。待降節の時期にわたしたちは心を閉ざすのではなく、喜んで心の扉を開く者になりたいと思います。また大学と高中部との礼拝における交流の報告は、本学院に一貫するものが何であるかを如実に示していると思いました。(清水 正)

Wesley Hall News 第98号

発行 青山学院宗教センター 宗教部長 嶋田順好
東京都渋谷区渋谷4-4-25
TEL.03-3409-6537 (ダイヤルイン)
URL.<http://www.aoyamagakuin.jp/rcenter/index.html>
E-mail.agcac@jm.aoyama.ac.jp
編集 ウェスレー・ホール・ニュース編集委員会
印刷 万全社